

茶の湯 文化学会 会報

第102号 / 2019年9月26日
発行 茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
http://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/

令和元年大会見学会報告

山田哲也



展示会見学1

令和元年度大会見学会は、六月十五日の土曜日に本年度の大会テーマ「茶書研究の現在」に偶然一致した展覧会が開かれていた京都市上京区の茶道資料館で行われました。折しも茶道資料館は開館四十周年、今日庵文庫はその上を

行く開館五十周年の記念の歳にあたり、特別展のIとして「裏千家所蔵の優品」と題し、裏千家所蔵の優品茶道具の数々や、今日庵文庫に架蔵される茶書の逸品、今日庵文庫及び茶道資料館を創設した鵬雲斎千玄室大宗匠のコレクションなどが、一・二階の陳列室にひしめき合って展覧されてきました。

中でも二階の北側の展示ケースには、お目当ての茶書群が待ち構えており、伝相阿弥筆『長歌茶の湯物語』一軸、故永島福太郎先生に「垂涎の書」と言わしめた『烏鼠集四卷書』四冊、千宗旦の高弟で、伊勢神宮の御師杉木普齋自筆の『普齋伝書』八巻、京都・石清水八幡宮滝本坊の社僧

松花堂昭乗の寛永八年口切からの自筆茶会記一帖、安土・桃山時代の九州・博多の豪商神屋宗湛の『神屋宗湛日記』三冊という堂々たる布陣。ただ惜しむらくは、次の特別展Ⅱ「三冊名物記―江戸の知られざる名物図鑑―」に出陣のため、今日庵文庫の至宝中の至宝である山上宗二自筆の『山上宗二記』の御開陳が無かったことです。十月からは恐らくは江戸時代に書写された名物記群の中であって、安土・桃山時代に書かれた書物として燦然とした輝きを放っているであろうことは想像に難くありませんが、まことに残念！

さて、見学会当日はお天気にも恵まれ、格好の見学会日和。抽選により約100名の幸福に恵まれ、且つ強運の会員が参加。午前十一時、午後一時半、同二時半の



展覧会見学2

三回に分かれ、さらに、それぞれ展覧会見学班と呈茶班の二班編成で茶道資料館を堪能しました。会員諸賢の興味の向かうところは二階の北側にあることは言うまでもありません。学会側も手ぐすねを引いて待ち構えていたのは勿論のことです。会員が餌食になるか、それとも学会派遣の解説員が餌食になるか、茶書の醍醐味を如何にして味わうことができるか、死闘の幕開けです。午前十一時の第一回目は、『長歌茶の湯物語』、『烏

鼠集四巻書』、『普斎伝書』、『松花堂自筆茶会記』、『神屋宗湛日記』のそれぞれの内容、特筆すべき点など比較的余裕のある解説がなされました。『長歌茶の湯物語』には珠光も紹鷗も出てこないこと、つまりそれ以前に成立したものであること。『烏鼠集四巻書』には珠光も紹鷗も登場し、わび茶の世界が成立していく時期のものであること。『普斎伝書』が卷子本という中世的な伝書の形態を残していること。『松花堂自筆茶会記』に書かれている字を見て、誰があの昭乗の名筆を想像できるか。『神屋宗湛日記』には豊臣秀吉や千利休の肉声書き残されており、ほかの茶会記とは違う側面で貴重なものであることなどが解説されました。しかしこの後、午後一時半、二時半の二回は、解説員にとって二時間連続休憩なしの解説となり、解説と質問の両方に追われた怒涛のような二時間があっという間に経過してしまいました。私の

拙い解説でも、会員諸賢においては慈悲深い仏のようなご配慮をいただき、なんとか及第点だったようです。昨年もそうでしたが、改めて大会における見学会の会員諸賢に与えるインパクトを感じました。これからの大会でも苦心するでしょうが、見学会実施に向けて頑張りたいと思います。

令和元年度大会

令和元年度の茶の湯文化学会大会は、六月十五日（土）、十六日（日）の二日間にわたり、京都同志社大学今出川キャンパスで開催された。

第一日目は、午前十一時から午後三時五十分まで、茶道総合資料館にて見学会が行われ、一〇〇名が参加した。《茶道資料館開館四十周年・今日庵文庫開館五十周年記念特別展Ⅰ》「裏千家所蔵の優品 併設展「鵬雲斎コレクション

撰」を山田哲也副会長に解説していただいた。

第二日目は、同志社大学今出川キャンパス至誠館を会場にして、研究発表、総会、シンポジウムが行われた。中村修也副会長の総合同会により、午前九時四十五分からまず熊倉功夫会長の挨拶があり、午前十時から十二時まで、矢野環副会長のもと、四題の研究発表が行われた。一、『君台観左右帳記』と三谷宗鎮『和漢茶誌』が示す烏蓋について―中国出土品と天目袖再現実験による考察（岩田澄子氏）、二、『八坂神社記録』における喫茶記録について（田村妙子氏）、三、『師守記』にみる喫茶（島崎綾子氏）、四、『Thayer 家に受け継がれた岡倉覚三（天心）の茶道具―Kellio Thayer 夫人との出会いから』（大和田範子氏）の四題で、それぞれ二十分の発表に対し十分の質疑応答時間が設けられ、各題とも二、五の質問が出、活発なやり取りが



総会



大会シンポジウム



懇親会

あった。

午後は、十二時五十分から総会が開催された後、一時半から五時二十分まで、シンポジウム「茶書研究の現在」と題し、熊倉功夫参との司会により行われた。発表順に、基調講演「茶書研究の過去・現在・未来」（熊倉功夫氏）、「宋代茶書の再検討―『茶録』と『大

観茶論』のテキストについて」（高橋忠彦氏）、「日本における清代散逸茶書について」（梁 旭璋氏）、「資料紹介・井上正三筆『柳湖堂煎茶会記』―ある美術商の自筆著書『謙函録』」（船富富美子氏）、「茶書研究と江戸和尚茶湯記」（岡 宏憲氏）、「千利休研究と茶書」（原田茂弘氏）、「重要な名物記は何か

―経過的祖形―」（矢野 環氏）であった。会場から提出された質問に答える形でのディスカッションが行われた。この日の参加者数は百六十四名と大変盛会であった。また、初日の夕刻からは懇親会がルビノ京都堀川で、八十名の参加を得て開催された。

令和元年度総会

総会は令和元年六月十六日（日）十二時五〇分から、大会会場である同志社大学今出川キャンパス至誠館で行われた。最初に、第一議案の「議長選出」において、神谷昇司理事が満場一致の賛成で選出

され、その後は神谷議長により議事が進行された。つづく第二議案「平成三十二年度事業報告ならびに決算の件」、および第三議案「令和元年度事業計画ならびに予算の件」は、それぞれ報告、提案があり、第四議案「役員改選」は、中村利則副会長が会長に、熊倉功夫会長が参与に、いずれも異議なく全会一致で承認された。

理事会

令和元年度第一回拡大理事会在、令和元年七月十四日(日)午前十一時より同志社大学今出川キャンパス至誠館会議室においておこなわれた。理事十七名と幹事六名が出席し、中村(修)副会長の司会進行で以下の議題について討議が行われた。

- 一、各担当理事より事業報告
- 二、令和元年度総会・大会についての報告

三、令和二年度総会・大会について

四、令和元年度予算案について

五、会誌・会報について

六、中村利則会長退任願の取り扱いについて

七、その他

第一号議案では、令和元年度の各地例会について、出席の担当理事よりそれぞれ報告が行なわれた。また第四十二回研究会、一九年度の各地例会案について、出席の担当理事よりそれぞれ報告が行われた。第四十二回研究会については、中村(修)副会長よりスリランカが提案されていたが、国より渡航許可が下りないため、中国浙江省へ変更になったと説明があった。

第二号議案では、令和元年度総会・大会について同志社大学で行われ無事に終えることが出来たことが報告された。

第三号議案では、令和二年度総会・大会の場所について案が出さ

れ、次回の理事会にて決定することが決まった。

第四号議案では、令和元年度予算案が、既に赤字予算として組まれているため、問題であるとの指摘があり、これについては改め、改善する方向で議題が話し合われた。

また郵便料金の値上げや払込用紙での支払いに伴う手数料の値上げが、今後見込まれることを受けて、ゆうちょ銀行への直接の入金、払込用紙の青紙への変更が提案された。会員減少に伴う会費収入の減少を止めるため、会員の勧誘を積極的に行うよう依頼があった。その一つとして、Facebookの活用が提案され、運営・管理人等、次回の理事会に報告することとなった。

第五議案では、会報について池田理事より、一〇一号が新しいデザインにて発行されたこと、また質問コーナーの解答へのご協力を、理事・幹事にお願ひされた。

会誌について山田編集委員長より、次号が九月末に間に合わず、十月発行となるかもしれないとの報告があった。

第六議案では、中村利則会長退任願の取り扱いについて中村利則会長より「会長退任願」が出されたことを受け、来年度の総会までは会長とし、中村修也副会長を会長代行とすることが承認された。

第七号議案では、八幡市立松花堂庭園・美術館より「後援名義使用許可申請書」が出され、承認することが決定された。

また、「茶の湯」が無形文化財化として認定されるよう働きかけるワーキンググループの座長を中村利則会長に代わり矢野副会長が引き継ぐことが承認された。

中村利則会長より、教育システムを構築したい意向があった。会誌へのリジエクトがひどく、書き方等勉強出来る場を作りたい。茶の湯の若手の研究者を育てたいとの提案がなされた。

田中理事より、科学研究費の受け入れ機関として、学会が役割を果たしてはどうかという提案が出され、矢野副会長が検討することとなった。

谷村理事より、海外の学会員希望者の受け入れに関する質問があった。海外の学会員を受け入れる場合の会費の支払い方法、学会誌の発送の費用負担は、指定銀行へ円建てで入金してもらうことなど、今後検討することとなった。

例会

東京例会

(令和元年六月二十九日)

「松平親良と瓢々庵について」
依田徹

二〇一五年の茶の湯文化学会大会のシンポジウム「明治東京の茶の湯の黎明」において「八百善茶会記について」を報告した時、松平瓢々庵という茶人が特定でき

ず、課題として残した。その後の継続調査により、杵築藩主の松平親良とほぼ特定できたことを報告する。

親良は文化七年(一八一〇)に世子として江戸の藩邸に生まれ、十五歳の時に九代藩主として襲封した。明治四年(一八七二)の廢藩置県によって杵築藩が消滅した際、親良は六十二歳で杵築から東京に移ったと推定される。高橋箒庵『近世道具移動史』(慶文堂書店、一九二九)は、明治初期の旧大名の茶人として親良の名前を挙げている。当時は極めて道具の値段が下落しており、親良は掘り出し物を買って求めていたと記録されるが、この記述だけでは瓢々庵とは同定できなかった。しかし山本麻溪・木全宗儀『古今茶湯集』(木全宗八、一九一七)の巻末に、親良を「瓢々庵」とする記述が見つかった。さらに大正五年(一九一六)の『杵築松平家売立目録』に、明治十六年に瓢々庵が使用した

「瀬戸茶人 銘壁観」が確認され、ここから両者を同一人物と確定してよいと判断したい。

『八百善茶会記』と『古今茶湯集』を併せると、親良は主客の合計で三十五会の活動が確認され、明治十年代の重要茶人となっていく。また大名茶人の交友を続けていたという点、他の大名家の名品蒐集に先鞭を付けていたという点でも、同時期の一動向を象徴する茶人と位置づけられる。

「明治十年代における茶道具の売立価格と購入者―三井銀行幹部による加島屋広岡家の茶道具の入札会の分析より―」
高原明子

本発表は、明治十四年に、三井銀行の関係者が参加して行われた、加島屋広岡家の茶道具の入札会の調結果である。大阪で大名貸を営んだ加島屋広岡家の私的な史料及び経営・家政史料の一部が『大同生命文書』としてまとめられ

公開されている。『大同生命文書』に伝わる三井銀行関係者による茶道具入札会の史料は、三井文庫にも同内容のものが伝わり詳細な記録が遺されている。

小石川三井家の七代当主高喜および息子の高景、広岡家の別家五兵衛家に嫁いだ高喜の戸籍上の妹である浅が取り仕切り、三井銀行の関係者による広岡家の茶道具の入札会が明治十四年五月に二度開催された。落札価格を調査すると、当時、主力輸出製品の一つであった蒔絵類に相対的に高額がつく一方で、純粹な茶道具の評価は低いものであることが確認できた。

この入札には、初回は十五名、二回目は十二名が参加しており、高喜、高景の他は、副長兼元締内用専務の西邑席四郎、副長兼元締外用専務の三野村利助、一等監事の今井友五郎といった幕末から三井に奉公していた三井銀行の幹部であることが明らかにできた。また、幕末より彼らは当主たちと共に

に茶の湯を嗜んでいたことも史料より確認できた。

三野村は、明治十七年の東京山王の星ヶ岡茶寮の開設に発起人として尽力している。星ヶ岡茶寮は会員制で運営され、寮則には千家茶道復興を目指しつつも旧来のものには拘らない旨が記載されており、三野村が近代的発想の持ち主であることが窺える。しかしながら、三野村や他の入札会参加者が益田鈍翁やその周辺の近代数寄者たちと茶会を通じて親しく交際する記録は普見では見出せなかった。

尚、本調査の分析は限定的ものであり、同時期に実施された他の入札会の分析、前後の時代の茶道具の取引価格との比較が今後の課題と認識している。

近畿例会

(平成三十一年四月二十八日)

「京焼の煎茶器にみる異国趣味」

梶山博史

十八世紀中頃、売茶翁の登場によって、明清時代の中国における飲茶法である煎茶が、日本で広まった。それに伴い、文化の先進地であり国内屈指の窯業地でもあった京都では、十八世紀末から十九世紀初頭に煎茶器が作られた。柳下亭嵐翠『煎茶早指南』や滝沢馬琴『羈旅漫録』には、煎茶器を手掛ける陶工として初代清水六兵衛や初代高橋道八らの名が挙がる。今に残る作例からは、唐物を模倣した急須などを主に制作していたと推測できる。

十九世紀中頃になると、その次世代である青木木米・仁阿弥道八・永樂保全らによって、唐物の煎茶器にはない異国趣味をまとった、独自の煎茶器が作られるようになった。当時の日本人にとって、憧れの対象となる最も身近な異国は中国である。明時代の景德鎮窯で作られた染付・赤絵・金襴手、漳州窯で作られた呉州手・交趾など、既に抹茶器として日本で受容

されていた中国陶磁の色彩や文様が、煎茶器に引用された。また、清時代に開発された、中間色を用いる絵付技法である粉彩も用いられた。さらに、朝鮮半島・東南アジア・ヨーロッパなど、様々な舶来陶磁の特徴的な文様・色調・形状を翻案し、煎茶器に採り入れている。イメージソースは陶磁器に限らず、明時代の版本である『芥子園画伝』(絵画技法書)や『方氏墨譜』(墨の図案集)に載る図像まで引用されている。京焼陶工の煎茶器からは、いかにしてエキゾチズムをまとわせるかという、貪欲な姿勢が窺えるのである。

金沢例会

(平成三十一年八月二十五日)

「前田家伝来の斜茶碗」

宮武慶之

現在、個人が所蔵する高麗五器手茶碗銘「斜」^{しやみ}は、かつて小堀政一(遠州/一五七九―一六四七)が所持したのち、昭和二十年代ま

で加賀藩主前田家に伝来する。

前田家の蔵帳である「表御納戸御道具目録帳」中、名物や主要な道具が所載された「名物并上之御道具品々寄帳拾三冊之内 壹」には九碗が所載され、その一つが「斜茶碗」すなわち個人蔵品である。

斜茶碗は平成三年(一九九一)九月に北陸朝日放送開局記念として石川県立美術館で開催された「加賀の名宝―茶道美術を中心―」に出品されたが図録や出品目録は作成されておらず、展覧会以後は作品の形状すら知ることができなかった。本碗はこれまで所在不明であったが今回、調査により個人が所蔵していることを確認した。

本碗が重要な点は遠州の所持した点である。というのも遠州の茶会記中、寛永十七年(実際には寛文十六年)正月二十日晚に一度だけ「斜高麗」が使用されている。本碗はひびづみの漢字として斜が用いられるが、遠州の箱墨書がある

茶碗では他に「ひづみ」（個人蔵）や「邪高麗大」（『大正名器鑑』）が知られる。従来、この茶会で使用されたのは「邪高麗大」であると考えられてきたが、本碗こそが茶会で使用されたものと判断される。又これらの同じひづみの銘を有する茶碗は、やはり遠州の好みになうものであり、関係性を考える上でも重要な作品と位置付けられる。

前田家の入手については、遠州が茶会で使用する八日前に加賀藩四代藩主前田光高（一六一五—一六四五）が参会しており、茶会の際に閲覧に供され、その後もたらされたと考えられる。

遠州と前田家との関係は利常や光高との交流が知られ、遠州没後は遺物の多くが前田家に贈られている。そのため本碗は遠州存命中に前田家に譲渡された作品であると同時に、光高との交流を考える上での重要な作品と結論した。

例会のご案内

「茶会における青銅器」

田畑 潤

東京例会

二〇一九年十二月十四日（土）

午後二時～

会場：静嘉堂文庫美術館

「日本にあつた陸羽像」

岩間真知子

「移送の名物記『唐物凡数』—その意義と『山上宗二記』」

竹内順一

静岡例会

二〇一九年十一月七～十日

会場：グランシップ

「茶のある空間のしつらえ」

「中国文人の茶文化」と「日本の民芸茶文化」の両者の生活文化を紹介します。

近畿例会

二〇一九年十月十九日（土）

茶道資料館「『三冊名物記』—知られざる江戸の茶道具図鑑—」

展開連

午後一時～三時

会場：同志社大学今出川キャンパス至誠館S 一番教室

「『三冊名物記』へ至る道—大永から享保へ—」

矢野環

「『三冊名物記』の成立と展開」

橘倫子

午後三時半～午後五時

会場：茶道資料館（入館料をお支払ってください。）

二〇二〇年二月二十九日（土）

午後二時（開場：午後一時半）

会場：大阪市立東洋陶磁美術館

地下講堂

「茶の湯と竹工芸（仮）」

巖由季子

「煎茶と竹工芸（仮）」

宮川智美

*当日は、特別展「竹工芸名品展：ニューヨークのアビー・コレク

ション—メトロポリタン美術館

所蔵」開催中です。

*近畿例会のみの出席は、入館料

不要ですが、特別展の観覧には、

別途、観覧券の購入が必要です。

北陸例会

二〇二〇年三月二十八日（土）

「未定」

金沢例会

二〇一九年十月六日（日）

移動例会 奈良方面

二〇二〇年三月
未定

高知例会

二〇一九年十二月八日(日)
午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶
室

「茶の湯関係文献を読み所感の発
表」

岡倉天心『茶の本』第四章輪読
茶事 正午～午後四時

席主 四名
会費 五千元

二〇二〇年二月三日(日)
午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶
室

「高知支部二〇二〇年度事業計画」
発表者未定

茶席

茶の湯文化学会の研究成果を実践

する。茶の湯を一般の方々にも親し
んでもらうため「床飾り」「道具
立て」はするが、お点前はお客様
第として楽しめる茶席を設ける。
会費 三百円

お知らせ

●質問を募集します

会報一〇〇号発刊を記念して、
一〇一号以降「質問コーナー(仮
称)」の欄を新設することになり
ました。会員のみならず茶に
関する学問的な質問を募り、質問
内容に近い分野の研究者が、これ
に紙面上で回答するという企画で
す。この質疑応答を通して、会員
相互の交流をより密なものにする
とともに、最新の論点を含む知識
を得る場を設けたいというのがお
もな目的です。質問に際しては、
以下の点をご了承下さい。

質問は記名とし、文章は簡潔で
分かりやすい表現にして下さい。

なお、寄せられた質問の中から、
学会員全体にとって有益と考えら
れるものを選別し掲載いたします
ので、掲載されない質問があるこ
ともご了承下さい。したがって毎
号このコーナーが掲載されるとは
限らず、質疑応答の両文が調った
段階で掲載するということになり
ます。

どうぞふるってご質問をお寄せ
下さい。

●松花堂美術館 令和元年 特別
展「茶室のアイデア 中村昌生と
『庭屋一如』」

令和元年十月二十六日(土)～十
二月八日(日)

茶室・数寄屋研究の第一人者・中
村昌生の「庭屋一如」の考え、そ
こに込められた心と技を紹介する
展覧会。

〈講演会〉

令和元年十一月三日(日・祝)
午後一時半～

「茶室・数寄屋建築の技と伝承」
日向 進

令和元年十一月九日(土)

午後一時半～
「茶室の位置づけ」
池田俊彦

令和元年十一月十日(日)

午後一時半～

「中村昌生と庭屋一如」
吉江勝郎

*各回、講習室。各回、無料。

〈皇茶席～庭屋一如の楽しみ〉
令和元年十一月二十九日(金)

午後二時～

席主 影山純夫
庭園内、松隠 広間にて。
料金・八百円

*以上のお申込みは、八幡市立松
花堂美術館にお問い合わせくだ
さい。

電話(〇七五)九八一〇〇一〇